

ヤスパース哲学における「例外者」

—ヤスパースにおけるキェルケゴール思想の受容の観点から—

中村元紀(東洋大学大学院)

本発表は、ヤスパースの実存概念を、特にキェルケゴール思想の受容の観点から検討するものである。ヤスパースは、「私の『哲学』へのあとがき」(1955年)という小文のなかで、「私はキェルケゴールの実存という概念を自分のものにした」と述べている。だが、同じ文章のなかで彼は、「私はキェルケゴールの信奉者にはならなかった」とも記している。この二つの発言は、ヤスパースが自らの実存概念を、キェルケゴールに大きく依拠しながら構築しつつも、その後者の思想に全面的に同意していたわけではないことを示唆している。本発表では、これまでの先行研究を踏まえながら、キェルケゴールに由来する「例外者」(Ausnahme)という概念に焦点を絞り、その概念の受容がヤスパースの実存概念の構築においてどのような役割を果たしたのかを検討することにしたい。議論では、特にヤスパースの『真理について』が主な典拠になるだろう。ただし、彼の意図を把握するために、その他の著作、具体的には『世界観の心理学』、『哲学』、『理性と実存』や『実存哲学』なども参照される。

ヤスパースが「例外者」という概念に言及する最初期の著作は、『哲学』(1931年)、『理性と実存』(1935年)および『実存哲学』(1938年)である。ただし、この概念がより本格的に論じられるのは後期の主要著作の一つ『真理について』(1947年)を待たなければならない。「例外者」とは、後段でより詳しく述べるように、キェルケゴールが人間の存在のありようを考える際に好んで用いた言葉である。『真理について』において「例外者」という概念に言及する際に、ヤスパースはニーチェの著作に触れることもある。だが、頻度としてはこの概念をキェルケゴールに関連させている箇所の方が圧倒的に多い。

では、そもそも「例外者」とはいかなる概念なのか。この概念は、キェルケゴール(そして、彼の影響を受けたヤスパース双方)において実存概念と深く結びついている。ただし、キェルケゴール自身はこの概念に明確な定義を与えながら用いたわけではない。その概念を定義した上で、実存概念と結びつけ論じたのがヤスパースである。ヤスパースによれば、この「例外者」という概念は「否定的決意」(negativer Entschluß)を意味しているという。否定的決意とは、自己固有の真理を求めるがゆえに、自らの身を滅ぼしつつも、世俗的な現世を一切徹底的に否定することで自らの本来の存在を成就しようとする行為のことである。より簡単に表現すれば、自身の実存のために世俗的な価値を否定し、それとは別のところで本来の自己の価値を見出す行為であると述べることができるだろう。

この「例外者」という言葉は、この点はより慎重な精査が必要ではあるが、「単独者」(der Einzelne)とも言い換えられる。後者の言葉もキェルケゴールに由来する。重要なのは、「例外者」にせよ「単独者」にせよ、ヤスパースにとって、これらの用語は単なる抽象的な概念ではなかったことである。というのも、ヤスパースにとって、例外者・単独者とは、キェルケゴールその人が体現しているものに他ならなかったからだ。キェルケゴールによる教会攻撃、レギーネとの婚約破棄、聖職者への就職に対する断念が例外者の姿の内実を示すことになるだろう。真のキリスト者であろうとして、自らの生をも賭して、殉教者であろうとする姿に、ヤスパースは例外者という実存が現実化している姿を見た。

ただし、もし仮に例外者という実存概念が、キェルケゴールその人とのみ結びつくものであるとすれば、それは哲学的概念とは当然言えないはずだ。まさに、ヤスパースが彼自身の著作のなかで行なったのは、キェルケゴールが自らの実存を賭けて示した例外者あるいは単独者という実存のあり方を、キェルケゴールその人との結びつきをいったん切断し、哲学的概念として再構築することであった。

以下では、これまでの先行研究と本研究との相違について簡単に述べることにしたい。これまでの先行研究でも、ヤスパース哲学における「例外者」という概念の重要性は軽視されてきたわけではない。そして、その概念がキェルケゴール思想に由来することもすでに指摘されてきた。しかし、従来の研究では、例外者という概念の来歴が言及されても、そもそもキェルケゴールにおいてその概念が本来持っていた意味について十分な理解がなされないままに議論が行われてきた。対して、本発表では、ヤスパースが自身の著作のなかで引用するキェルケゴールの言説を、キェルケゴール思想の内在的な理解を踏まえることで読み解いていく。

このようにキェルケゴールの思想自体をより正確に理解することで、彼とヤスパースの実存概念との相違、および後者の思想の独自性についてもより正確な理解が得られるだろう。ヤスパースも、たしかにキェルケゴールにならい、人間はひとり孤独のなかで自身の内面性に向き合い、かつ自身の存在根拠である「神」(ヤスパースの言葉を用いれば「超越者」(Transzendenz))に対峙するとき、実存を体現するものとなると考えた。その実存を体現する者こそ、例外者と表現されるものだ。ただし、キェルケゴールにおいては、神と対峙する例外者は、他者との「交わり」(Kommunikation)を拒絶し、断絶してしまう者でもある。神とのみと対峙し、他者との交わりを否定する例外者としての実存のあり方がここでは問題となっている。キェルケゴールは、例外者が自分の内面性に向きあい、自分の外部にある世俗を遮断し「沈黙」(Schweigen)をなすものであると考えた。そして、そのように沈黙を続けていくと、「自分の思い描く真理は絶対的に正しい」という主我的な考えに陥り、他者との繋がりを断絶することになってしまう。この実存のあり方は、キェルケゴールの『不安の概念』(1844年)や『死に至る病』(1849年)における表現に従えば、「デモーニッシュなもの(悪魔的なもの)」(das Dämonische)であるということができる。

ヤスパースは、このような例外者としての実存を認めながらも、それが他者との交わりを拒絶する点については批判を加えていく。他者の交わりを否定することは、自らの真理を絶対化し、他者にもそれを強要する独善的なものだと思われた。ここに私たちは、キェルケゴールとヤスパースにおける思想の相違点を認めることができる。ヤスパースはたしかに孤独のなかで自分自身と向き合い決断を行なっていく例外者のあり方をキェルケゴールから学び取った。しかし、ヤスパースの述べる真の実存とは、そうした例外者のあり方を尊重しつつも、同時に他者との交わりを求めていく存在のことを意味していたのである。